

---

# そらかける馬

あゆみかん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そらかける馬

### 【Nコード】

N6442T

### 【作者名】

あゆみかん

### 【あらすじ】

【ファンタジー／神話系／短編】 幼子、光魄は、卵を拾った。王権の支配時代、農牧業が営みの中心であり、羊毛・皮革や肉などを生産する乾燥・砂漠地帯の遊牧民たち。一定の土地に住まうことは決してなく、粗末な継ぎ接ぎだらけの衣を進んで纏い、陰日向でも自由よ意思よ、それは曲がらないと誇り失わず。水や草を探し求め、家畜と共に生きることを拒まず受け入れて選んでいた……馬かける世界観的小説。

## そらかける馬・上

> i 2 4 8 3 2 — 1 7 7 5 <

雄々しいたるや大草原よ、緑黄、陽光に晒された生命の息吹よ。  
母なる大地は、その精神を受け入れ、輝きを失わないよう祈りを  
捧げ、二六時中に過程を見守る。

この大平原の果てはない。あるのは、腐れぬ亡者どもの生す欲望  
と自由ぞ。過去と賊徒の蠢動が地を足で叩き、然と、包む母の腕は  
嗚呼、憐れ世と嘆きを吐くだろう。

飛び立つか、恐れを忘れて。  
それが佳かろう、孤よ、我が先にと急ぐがいい。廻ると尚佳い、  
失態は後に華が開く。それは鮮やぐ紅き汗血、馬の蹄は、そらかけ  
る。

幼子、光魄は、卵を拾った。

やがて持ち帰ったそれは数日を懸けて孵化し、だが白く、目の玉  
にも似た艶出る塊だった。触ると啼き、空いた穴、空洞の奥からヒ  
ユウウと幽かに意思を息吹いている。

押し潰してはいかぬと、光魄は、それはそれは大事に手に包んで

持っていた。

大高原北部の内陸国である帝国は、かつては共和制だった。だがそれも時が過ぎ、法による制限君主制的背景を経て、何物にも制約されない頑なな絶対君主制へと移行していった。王権の支配時代である。

農牧業が営みの中心であり、牛や馬、羊や鶏といった家畜などを飼養し、羊毛・皮革や肉などを生産する乾燥・砂漠地帯の遊牧民たちは、一定の土地に住まうことは決してなく、粗末な継ぎ接ぎだらけの衣を進んで纏い、陰日向でも自由よ意思よ、それは曲がらないと誇り失わず水や草を探し求め、家畜と共に生きることを拒まず受け入れて選んでいた。

成長を妨げるものはない、すくすくと自然に幼子だった光魄は兄弟姉妹、それから父と母の親元で健やかに育ち、このまま青年への過程を愉しむことになるだろう、周りの大人たちは揃わぬ肩を並べて微笑み、いつも声を掛け合っていた。

「光魄、明日は東方が雨が」

「いや、風は、あちらに向いている」

まだ背伸びをしなければ大人と目線を合わせられず、光魄は張り切って羊の世話を手伝っていた。気になるのは、数日前に取り付けた家<sup>グル</sup>で、休んでいる友のこと。人ではない。昔となる以前に、見当たらず巣から持ち帰った、白い仔馬よ。

やがて光魄と同じく順調に成長する彼を、光魄は友と呼んでいた。勾玉のような始め、今では立派に馬らしき姿見で周りを安心させていた。嗚呼、やはり馬だったのだ、異形ならば手にかけてねばならぬ。光魄には発想なき暗雲の事情も、大人たちは視線を合わせし了解を得ていたのだった。弓と刀は、腰に据えている。

光魄が友と呼んだ仔馬、名を『喜遊』と付けていた。

加減はどうかと語りかけてみても、横たわる喜遊は小さな瞳を見せて伏せるだけだった。

(お前はいつも我を心配させるな……)

苦笑いを懐に、光魄は昼、用事へと外へ出て行った。「愛琳」光魄は、ひとつ下の妹の名を呼んでいた。

洗濯物を入れた葦の籠を小脇に抱えて、年の近い子らと談笑していた愛琳は、生まれついた巻き毛をくるくるとさせて負けじと同じく可愛らしく、くりくりとさせた目をこちらへと向けて返事をした。「なあに」高く子どもらしい声は耳によい。

「喜遊の具合がまだよろしくない。帰ってくるまで、気にかけておいてくれ」

愛琳は「はい」と明るい声を返した後、小首傾けて笑った。笑顔は変わることはなく、夢中だった途中の話に戻ってしまうと、見届けた光魄は去っていく。

心中、友のことばかり。

初めてのことではないのだ。いつもそうだ、弱りがちなお前は我を心配させ、そして……。

元気な時には、忘れたように地を駆けるのだ。あの草原を。

そんなお前が、好きなのだ。

まだ温かき地面に爆ぜる砂や土は、光魄の足もとで従って舞った。いつか、お前に跨り共に走り出す時を待とう、そんな希望を胸に描く。空は空気と共にある。沈んだ空気は空へと昇る。我は知っている、我は、自然の一部成り。

今日も地表の上の何処かで、虹架ける。

「あれは何だ」

明星が西天そてんに掲げた頃、ふと頭こぶしを上げた若者が、遠く地平の線へ指をさし言い伝えた、風がそよぐ。「人だ」視野の広く、千里の先を見渡せる程に力のある者が己の自信を携えて、堂々と言い放つ、あれは人ぞと。「なんと」追い立ての鞭を落とし、眼まなこは一心に。

まだ黒影は、遠く。ゆつくりと、間近へと。「怪我をしているよ  
うだ。女子おんなこだ」

やがて鮮明に、その女子は野営の地へと辿り着いた。胡粉色で袖のある被布に腰帯を巻いた格好だったが、肩に矢の突き刺さった痕が色濃く衣服に滲み現していた。擦過傷の残る素足だった。

「名は何と？」

> i 2 4 8 2 6 — 1 7 7 5 <

近寄る光魄が震え問えば、女子は息荒くも、確かな瞳と通じる言語で意志の強さを明らかにする。

「珠玉たまご……」

頬ほ瘦け崩れかけていた身体は光魄に頼ると、気絶してしまった。

此れは何なのだと光魄の瞳は訝しがる、それは周囲の者にとっても

同意で、女子は直ぐに医術の心得のある者の元へと運ばれた。

養生の時を経て半月ばかり、大分と調子を正常にと戻しつつある女子、珠玉は、日中、羊の世話に忙しく働く光魄の所へと訪れた。広草原を眺めて遠目、羊より彼方前方を見つめる光魄に、珠玉は照れながらも挨拶を交わそうと真面目努めていた。「あの……」呼びかけは強弱アクセントの強を前に、後ろ小さく、俯いて息を吐いた。深呼吸をしたくても思うままにはついていけず、頑なに心縛られていた。

「どうしたことか？ もう身体は充分に良いのか。そうだ、それら」  
「え」

突然に、光魄が手を上げて珠玉を驚かせていた。光魄は放り投げたよこしたのだ、白い布包みに隠された、ごつごつとした表面を持つその袋を。「これは」珠玉は腰を曲げて刹那に目を閉じてしまっ  
てはいたが、すぐに開けて両手、手の平に載った重みを、しかと確かに受け取った。

「私の家畜から摂った生薬だ。気にせず、口のなかに入れるがいい。呑みにくいなら噛んでもいいが、苦いかもしれない。好きにされよ」

光魄の施しに珠玉は最初身を如何うたすることも出来ず、光魄と手の上の袋を見比べていた。光魄は会話を続けたくと、珠玉を見つめ、関心を半ばそちらへと移すに至る。

「何か申してみよ」

光魄の尖り瞳は珠玉には脅威、まるで主君を前に非礼や粗相をしでかしたかの如くで、直ちに場を立ち去り露へと消失したならば酷く幸いだらうと珠玉は身冷えた。

「謝の意を……」

気体に溶け入りそうな聞こえの届かぬ声が、光魄を動かしていた。僅か、数の歩みすうは双方、体感の温度も変わろう。然し光魄の芯は揺らぐことがない。

「済まぬことだ。怖がらせたつもりは……毛頭なかった。楽に」  
土の被った手を差し出、光魄は微笑みを口に含み単に詫びた。珠玉はホツと胸を撫で下ろし、光魄の、血の通うはずの冷たき手を取った、そして首を振る。

「私のような、身分無き、はしたない小娘を此処まで尽くして下さい。貴方がたに、どう感謝の意を示せばいいのか……嗚呼、私には考えが及びませぬこと。失礼を……」

力無き手は、まだ光魄の内にあつた。「気にせずに。それより、そなたは……」会話は続いた。

「そなたは、何処から来て、何故あのような目に？」

率直な問いは、珠玉の予想範疇だっただろう。時をかけず、表白する。「私は北から……」

「北？」「恐らくは北。東を目指し、まずは砂漠を南へと下りて、そして此処へ……」

「何処で傷を」

「村落が、夜襲を受けたので御座います」

憂色に染まつた小さな顔を、光魄は同情の瞳で見つめていた。「逃げて、その傷か」我、その痛みを身に下さればと叶わぬ願いとして愚痴を零し、光魄は「命からがら」とを最後に空を仰いでいた。晴天は、非常に……心安らぐ、と。

光魄の耳に遠くの鷹鳥の、高い音が届いている。ヒィ、ヒョロロ、ヒィ、ヒ……ヒョロ……

穏やかな風が、泥沼の旅人をすくうのだろう。

「此処にいれば良いのだよ。やがては北へと向かうだろう、私の羊たちが、歓迎してくれる」



将来を家畜と共に過ごすこと定められた身空は、曇りがなかった。

「そなたと共に」

「良いのですか……？」

「不自由なく。友も、喜ぶだろう」

そう言い終えると光魄は、離れ、生活へと戻って行った。

用があれば妹の愛琳を呼べと伝えて、珠玉は光魄の家族の一員となった。まだ十と二になる珠玉、数えて十四を歳としている光魄。

「友……？」と、珠玉はまだ出逢いもない、『友』、その存在を認め合えるよう、光魄は働きかけていたのだ……

……

……出逢いを経て。年月という、時かける。

珠玉は、とても光魄を慕っていた。泣けば親身に、笑えば同じく、怒りは、静まれよと諫められて。上の兄姉の言いつけを徹して守り、下の弟妹の面倒をよく見、年老いていく父母には、育ててくれた恩義を終生、決して忘れないだろう。その光魄という人柄や忠誠心を、まるで貴方という人は石か鋼のようだと。憧れていた。

乾燥した荒涼地を転々と移し、光魄のいる集団は夏にヤギ、冬は羊や馬の肉を食す。家畜のために草を求め水を求めて定住はせず、そのおかげで自然形態を壊さず、また来季に草が生え水が湧くようにと跡形もなく潔く去る。四季か三季を一巡し、数十、数百とも数えられる天然資源は幸いにも極端な増減等はなく、光魄たちは全てにおいて豊かだった。

「さあ珠玉。愛琳と、裏のヤギの乳搾りに出向いておくれ」「はい。

今すぐに……あら、そういえば愛琳は何処に行ったのかしら……？」  
「ん、ああ、さつき子を放しに上基じょうきといたね。呼んできておくれ」  
「はあい」

今ではすっかりと自分の母にも成っていた光魄の母に甘え答え、  
珠玉は隣家（とはいっても数キロ先になるが）の上基、今年に齡7  
0にもなる老境を訪ねて愛琳を呼んだ。「あ」そこには背が伸び筋  
のよい骨格の若者たちがいる。

しかし珠玉の目にとまったのは陽に焼けた髪と肌、凜々しく整っ  
た眉と聡明そうな瞳の、……恋慕している光魄だけだった。「どう  
した珠玉。何、今からそちへ戻る所だ。何用だったか」光魄は、珠  
玉に近寄り見下ろしながら、足を外へと向けていた。

「愛琳は……呼びに」

「ああ、先に行ったよ。恐らく遊んでいるのだろう。仕方のない奴  
だ、すまない。私が行こう」

「え……」

「何か気に？」

「いやあのその。いいえ、感謝」

手を胸元で合わせてそれを俯き目で追う小さな体軀の珠玉が、光  
魄にからかいの動を起こさせた。「珠玉。草を踏むなよ」「へ？」  
「草を踏むと、ヤギが夢に出るんだぞ……」

大地を柵で傷めない、家を柱で造らない、草の根は食べ尽くさな  
い、と、自然を守り肩を並べて生きるその様は、突拍子もない伝え  
をこうして広めていくのである。木の枝を折ることも、許されなか  
った。

信じた珠玉は、その日から歩きに時間をかけるようになってしま  
ったという。遠くで「うメエエ」と、ヤギが待ちくたびれていた。

もうじき、時の権力者が、攻めてくる。

上基の孫のひとりである春菊は、何と夫婦の契りを申し込みに珠玉を夜、ラクダの眠る地へと誘いをかけていた。珠玉に跪き、「どうか当方と」と懇願していた。

急であつたため混乱した珠玉であつたが、きつぱりと断りの念を押していた。首を振り、自らも跪き、「このような私に」と同情を重ねていた、だが。

「耐えられず、御免」

謝絶は受け入れられずに、まだ青い春菊は動悸任せで無理やりに珠玉の身を引き寄せた。「しゅ……」赤熱した抱擁は、珠玉の小ささを明々白々に、焦がれた腕のなかでただ一時の戯れを赦しにと、暫く過ごしていた。

「春菊」「すまぬ。辛いのだ」「ええ……」

大地に、この闇のなかの動物は双方、あまりにも脆弱。光無き暗い視界の先は見えてはいなかった。此処にあるものは常住し、時を放棄したとなれば朝までこの闇は続くのだろう。仄かな香の揺蕩つ珠玉の柔らかな胸に頭を埋めたまま、春菊は微動だにしなかった。

> i 2 4 8 2 7 — 1 7 7 5 <

毛の先ほどにも気がついておらず、草を踏む失態を犯した若者は、同じ闇の輪のなかで、嘆いていた。

「今宵は夢に私の羊が襲いにくるのか……」

嘆きは誰にも届かず体は揺れて、揺れて……指先だけを天に、足は地に、反った背筋は腹筋を強くし、映らない瞳は、それでも何処かを巡っている。

もうすぐ、その時が来たり、と。

それが幾多の壁となり妨げるのかを、この時、光魄はまだ洗礼を受けてはいなかった。

> i 2 4 8 3 4 | 1 7 7 5 <



## そらかける馬・下

内陸北部、かつて統一国家が存在し共和を謳ったその華は、可憐憎くも散り墮ちる。崩壊は混乱を招致し災いを呼び、奇しくも天候にさえ疎まれて、旱魃飢餓や疾病、喉の渇きよ潤えばと厭いの戦乱は世に続く。

北部族の遊牧民たちは貧困の長抗争の後に連合を形成、従属民の数を増やし、東の有力集団の当主を討伐すれば次に西へと遠征に、勝利さすれば砂漠下へと 若き獅子の眠るやも知れぬ南下へと、時を奏でて満を持する。

夜に。

和を尊し、日々の営みを塞かさんと龕を懸ける光魄たち家畜の目の目前に、砂の埃を舞い上げて、遠方より来たる群集があった。

始め休みの牛飼いの牛が騒ぐ、そして次に羊、家畜が逃げ出し民は驚く。「何ごとか」「地響きよ、これは羊たちではない、別のものだ」光魄たちの感覚と耳に届くまでには時間差があった。床からやっと気がつかれた光魄は住居より出でて冥暗のなかを、走り来る何かを探るべく、目を細めて眺め佇んでいた、するとやがて。

ドドドド、ドドドドドド、ドド、ドド、ドド……

足である。此れは幻獣でも嵐といった災禍でもない、人の足。家畜の数にも匹敵する人の足が、砂の地を蹴り神速を真似て直進する。「受けて、賜、れええええい！」

意味の不明な事柄を、血走った輩は唾と共に吐く。小便にも似た水を四囲に撒きながら人の足は進み規模は扇状に広がり、散り散りに野営をする丸腰の民に情け容赦はなく襲いにかかる。天幕だった

住居は裂かれ破かれ、刺され形壊かたちされ。逃亡する牛もヤギも民も区別なく野人の腰から抜かれた貧刀によつて追い惑わされ終いには。

……。  
飛べぬ鳥は踏み荒らされる、紅に染まった小羽が砂塵に埋もれていた。「グゲエエエエエ」「ヒイイイン」馬も逃げ出していた。

> i 2 4 8 2 8 — 1 7 7 5 <

「火を！」

闇のなかの一点、そこだけは触れることがなく野人が避けて通る点があつた、点とはまた人、天然の長髪を黒く垂れ流しアマの布で頭を巻いた、野生児の風貌をする若き男だった。口唇を舌で舐め回して下腹を大事にと抱え摩りながら、女など興味を物色していた。

> i 2 4 8 2 9 — 1 7 7 5 <

「狼黎ろっれい。こいつら金品持ってねえぞ、ジジイとババアとブタばつかだ」

「ブタあ？ 馬鹿め、家畜様だ。牛や羊様と呼んでやれな」

「女を探せ！」

松明を持った小賊部隊が後から加わり、草に火を点けていた。燃

え移る。

「おのれえええ！」

沈黙ばかりではなかった。抵抗をする、平穏な民であっても。弓と刀を手に構え、体たいに飛びかかるが、自らが鮮血の末路。闇は紅を黒に変え、懲りず若者や動ける者は刃向かっていった。だが体格と敏捷の差が歴然、親と子の異同とやかくではなく天と玩具ほどの差異が否めずにいた。

「ひははは」「みる、……だ。献上するか」「親父は何て顔をするだろうか」

嘲りの非礼は、近く仲間の声で止まった。

「狼黎！ 女が2人いたぞ！ あっちだ」

目を光らせていた部隊のひとりが叫んで狼黎を呼んでいたのだ。

「すぐに行く」期待に笑い、汗に濡れた髪を掻きあげて後ろへと払う……東洋の香りが漂うが、彼なりのよき格好なのだろう。

「私の家族に何用か」

青年の目は鋭く光る、十数という数の、弓持つ野人がある家ケルの周りを取り囲んでいる。ひとり、立ちはだかったのは若き子、光魄だった。武器は一切を手に携えてはおらず、身体が楯となるべく覚悟の上か、堂々と出で立ちは清々しくも愚かな行為に受け止められよと野人は皆、苦笑していた。

「名は何と？」

集団のなかで連れられ先頭に出た狼黎、先ずはと前に出てきた、年も狼黎とそう変わらぬ若者に対し、小奇麗な顎を撫でて名を訊いた。「光魄と申す」素直に答えた光魄の眼光は、刺すように狼黎を炯炯けいけいと射る。「ほお……」下かの半身から頭の先、毛の先までを長々



と見つめ、狼黎はこの若者の存在を傲慢に認めた。野人は息を殺し腰を低く、呼号を沈し待つとする。

「我は狼黎、北からの使者。北の権力は我の父、紅蜀葵なり。名は届いているか」

「初聞で御座います」

聞いた狼黎の真面目くさった顔は、冷笑へと首傾いていた。

「その様か。なら、新しく聞き入れよ。地は、王のものである。早急に明け渡し、水、血と骨と肉、女、貴金属。我が大いなる黎明の主導者へ、物資の献上を驕るとしようぞ」

せせら笑いながら、立てた人指しの指が、光魄の背に未だ無事立つ幾数の住居ゲルに向けられていた。「此れへ！」との号令を以て、縛りの解かれた野人はなかを覗こうと、だが容赦のなく、情けは別に置いて素早く幕は爪で引き裂かれた。「暴君め！ 誰の理か！」光魄の怒りは尤も、だが一度二度裂かれた天幕は益には返らず、なかから人の居住が窺い見て知れる。

「女だ。ひい、ふう……年寄り子どもは不要。その2人を此れへ」  
「ひっ」

なかに居たのは光魄の母と、珠玉、愛琳、弟たちだった。まだ幼い弟たちを除き、男は不幸であるのか光魄以外に不在、光魄しか力頼れる者が居らず、指名されたのは珠玉と愛琳の2人と年頃になる華娘たちだった。

「上玉よ。連れ帰る」「何故!」「先に言ったであろう、主君、紅蜀葵に献上す」「冷やかな侮蔑の念は消えず、狼黎は自らで先ずは珠玉の手を引いた。「ああ!」「珠玉!」

光魄の早手は、珠玉の腕を掴んだ狼黎の手に伸びていた。狼黎から引き離して光魄の背後に珠玉がまわると、では、と愛琳の方へ顔が向けられていた。「よせ!」声高く。

然もその時だった。

狼黎たちにとって、信じ難き光景が映り瞬く。何と、馬が隣ゲルの住居より堂々颯爽と現れる。弱くも成長し、確りと四本の細き足しつかで立つ馬、恐らくは馬と断定できるは、少しばかりの勇気が要った。その語らねばならぬ豪壮な理由とは。

> i 2 4 8 3 1 — 1 7 7 5 <

「! ……此れ、は」

「馬……?」

「馬……」

「馬なのか? ……白い? 見たことねえぞ、あんな奴」

野人が騒ぎ、口々に言い合う始末なる。あの狼黎も、さすがと異

質に圧倒された故に、沈に伏せる、その隙よ。

「喜遊！ …… お前」

言い纏めたのは光魄だった。「私の友の『喜遊』、だ」「一点の穢れも無さげの至極極上の毛並みに、狼黎は圧倒されとて声を漏らすに言い放つ、こつ。

「何と美しい……」

追い詰められるも、目は煌々と血走生きゆく。喉は渴きの時を経て、飲み込んだ唾が食道を落ちる。美しいと評高を受けたあの馬、喜遊は、知ったことではないと軽く無視をし我友の下へと相近寄つて、光魄の身を案じと体傾け情けをかけた。

「無茶をするなよ、……喜遊」

「ブルツ」

身の震いをして、それが受け応えに転じていた。

ジャ。と、気配いち。

地砂を摩擦に滑り行き、熱く血の滾る狼黎、炎のように火照る体を此れ操作にとて苦心するにも我が儘に、何とか地に這うは避けて光魄と喜遊を徒歩に目指す。そして吐かれるは強き願望だった。

「其れを此れへ」

片手は挙げて誘いと、光魄に視線を向け促しと其の手は振りまかれたに見ゆる。

「何のことか！」

当然よと、光魄は厳つきで撥ねるぞと眼光向ける、「ツ……」背後の喜遊、動けず移るは諦めに見やりて静で体を為した。阿婆擦れな男は不毛にせせら笑いを揺らせると、仲間を呼んで耳打ちしたる。すると仲間は、何と珠玉を人質に、交渉垣間見る。「何を！」憐

れ光魄は、止められず。「光魄……！」狼黎は言った。

「お前の其の目、心動かされるに忍びない。ならと折衝、せつしょう試みるとする。さて、其の美しい白馬と、この美しい娘。片方を我へ、片方を捨て置くとする。極似た者同士に、どちらかをお前に選択願おうか」

馬と女と、二者択一を迫りて、愉快にと阿婆擦れな男、狼黎は腹を抱えた。「さてとて」申せよと集りくる。たが

「こ、光魄……」

「黙り、珠玉」

不安げに後ろ手を捕らえられて珠玉の胸は、高鳴りを背に反らせ誤魔化すとする。制した光魄は噛み付くが如くに睨みで真を見定めていた。下を向き交互にと幾度、狼黎の顔色を窺い知れるか。「馬と女、手元に残せるはどちらなるか、申してみよ」要求は其の儘に。双の内、片方失えば片方を得、選択は先を決定してしまえば……と恐れるる不穩の波に、光魄は意を遂にと決した。

「ならば、珠玉……を」

凜とした光魄の其の振る舞いに、猿群れにも似つき野人衆、見守れば顔見合わせ、たまに吠ゆる。

「ほう？」

「珠玉を、我に残し賜う」

其の変わらない姿勢は狼黎を一層に高揚、勃起させて抵抗を許すまじ。狼黎、真しやかに言い放つ。

「ははははは！ では、馬は頂いていくとする。お前とは生来の友人の如くに、長く末までの付き合いとなろうぞ。恐らくは」

狼黎は片手を挙げて野人共に指し、珠玉を解放すれば至極美しい白馬にと関心は移り変わりゆく。極上の毛並は、揺すれば相も変わらずに魅力を放たれし。

然し此の馬、光魄の元にと歩み寄りた。

「喜遊」

「ブルツ」

光魄、身凍りて喜遊を見やり一瞬、目と目が合った。<sup>お</sup>「愚かな」  
そう狼黎は鼻で笑うとする。「馬にも意思のあるうことか」狼黎の  
裏返りて甲高い声色は、皮肉を表す。声は聞き届かんと、光魄、草  
臥れた手を友に捧げんと伸ばした……其の場、ここぞと時が来る。

「喜遊！」

「ブルツ」

何と光魄、喜遊に自然よと跨る。<sup>またが</sup>地を蹴り筋を張り、光魄、愛お  
しく馬にすがりて離さずと、滑稽なる身よと卑下せし、顔上げられ  
ず。だが此の馬は、構わず拳は起こされる。

馬から生えゆく、白の羽よ。片翼、そして片翼と。

嗚呼、やはり。お前は珍獣なのだ……

やはりな……

もはや詠み人知らずの詠み歌も五音連声、五韻を忘却する程の吃  
驚と成り。騒ぐは野人の群れだに留まらず、<sup>とど</sup>珠玉や身内、呆れ惚け  
し揃いも揃い、一緒くたにされぬ。

狼黎も開いた目は塞がれず。白の羽が生えた珍獣を見つめんとす  
る。

跨れた馬、走り出すは空へ。滑走が助走、勢いは滞りなく体が宙  
にと舞うたではないか。光魄を乗せた馬は空高く、砂雜じる含有風

のなかを颯爽と翔て行く。「素晴らしい」……人々は追従し、時の権力者は二度三度目の感動を覚えるに。「素晴らしい……」

是非にと。狼黎はあの金馬は我が手中に納まるべきと豪語す、炎上した心塊を無視できず。其の後、狼黎は馬を手に入れるに成功したかは存じられ無き。

光、大地に降り注ぎ、行き先の無い当ての外れた旅かと光魄、空のなかと胸中を駆け巡る。今過ぎたことは全て幻想也とて嘯くも、軽佻浮薄であり戯言よと自らに戒めの訓を授けたる。

馬は天を指すが如く、晴天を一向に走るのみ。何処向く風と万人が万人呟くや。目下に聳える霊峰は、雲に隠れて凜乎たる。

其の様に此の馬と男は空を翔けながら。馬が想いを告げるまで、既に時分は過ぎていた。

『私は貴方を愛しています』

馬、喜遊は、突然に声を発した。人の声、始め天の声かと光魄、疑いを以て聞く。然し其れが友のものと理解すれば、心して聴くに至り。

『このまま貴方と駈けて行きとう御座います。天界、其処は非常に素晴らしい所です。貴方の様に清く。正しく、美しい人という者を惜しむらくは地上に置くのが勿体無くと』

此れには光魄、否定をあからさまに表し発する。

「戻るのだ、喜遊。戻らなければ……愛琳や母親たちを置いてきてしまった。私の足は、自然とお前に跨ってしまった。此れは我が迷い、其の他には無い。私は……私は、何ということを」

前に突き出した両の掌に、汗の雫が滲み出る。全身からの汗が一点に集中せしめよと浮かび光魄を苦しめんとする。後悔の念は抗う

ことが出来ずに光魄を追い詰め遣らし。

「願いだ。戻っておくれ……でないと私は」

汗に塗れた其の掌で顔を覆う。

「友よ。もう……お前とも友で居られぬ。私はお前を裏切ったのだ。お前を選ばず、珠玉をとった。……最低な男なる。如何して生きられ、お前と共に居られようか。此の様に無様で、罪深きことは無い」

此の男、光魄は女々しくも弱きを吐く……直ぐに察した喜遊、反論する。『お待ち下さい』

喜遊、見えぬ眼光に力無く廃人にも似た男、光魄に、憐れみと、服従を誓いてか明るくと声掛ける。

『私は嬉しかった。私を選ばなかったことで、私は知っている通りの貴方なのだと安心したのです』

「とは……？」

『もし貴方が私を選び家族を見殺すような方だったなら。私の背に、翼は生えていなかったでしょう……』

優しき珍獣。其の形容、真相まことしき。

『貴方を救い出せて良かった。羽が生えて良かった。此れでやつと貴方の役に立てることが出来る』

「では……」

『さあ戻りましょう、行くのです。皆を助けに。皆が救世主を、待っています……』

時世は救世主を望み、天は数多あまたのなかから代わりは居らずと唯一人を選ぶ。

馬に跨り剣を揮ふるった勇敢なる若者の話は口伝で語り継がれている。幼き子は知らない、其の先を。大人は知っている、其の先を。だ

が大人の口からは語られることは無い。子は夢を見、共に駈けてく  
れる『友』を探す旅に出るものだ。  
足を以て。

> i 2 4 8 3 2 — 1 7 7 5 <

雄大な大地を、空の代わりに駈けて行く。

《END》



## そらかける馬・下（後書き）

ご読了ありがとうございました。  
後日にブログ更新します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6442t/>

---

そらかける馬

2011年5月31日02時02分発行